

〔翻 訳〕

ババッド・タナ・ジャウイ (5)

第4部 ババッド・パジャン 2

深 見 純 生 訳

訳 者 序 言

本稿は『ババッド・タナ・ジャウイ』の第4部ババッド・パジャンの2回目（第28～33章）である。パマナハンがマタラムに入ってから、マタラム国守を継いだその息子セナパティが西方へ勢力を拡げ、そして南海の女王ニヤイ・ララ・キドゥルとの邂逅をもつまでが語られる。

セナパティとニヤイ・ララ・キドゥルの出会いの話はたいへん有名であり、とくにニヤイ・ララ・キドゥルについては『ババッド・タナ・ジャウイ』以外にも様々な語りがなされていることは前回の解題に示したとおりである。今回の第32～33章において語られる一連の物語——セナパティの枕許に落ちた星の予言、それを突き放すジュルマルタニの諫言、セナパティが海底の宮殿において南海の女神ニヤイ・ララ・キドゥルとの邂逅をもち、その予言と教えをえて地上に戻り、スナン・カリジャガに諭される——については、青山亨〔2004〕が詳しく紹介しつつ、ジャワのイスラム化過程における文化史的な意味を論じている。星や光り輝くものの位置づけをは

* 本学国際教養学部

キーワード：ババッド・タナ・ジャウイ，マタラム，パマナハン，
セナパティ，ニヤイ・ララ・キドゥル

じめ、この部分には様々な議論，解釈の余地があると思われるが，いずれにせよ，ニヤイ・ララ・キドゥルという非イスラム的な（つまりジャワ的な）文化表象と星の予言やジュルマルタニの言葉の中に入り込んでいるアラー，アラーへの懇願，アラーに聞き届けられるなどという，一見したところイスラム的な文化表象のもつれた関係が興味深いところである。

ニヤイ・ララ・キドゥルとの邂逅の物語は『ババッド・タナ・ジャウィ』という超自然力に満ちた物語世界のなかで，ひとつのクライマックスをなしているといえよう。そしてセナパティがニヤイ・ララ・キドゥルからえた援助の約束は，第35章から第36章の戦いの場面で次なるクライマックスにつながっていく。

解 題

2. メインスマ版

(3) クルタプラジャ (Raden Ngabehi Kertapraja)。ウィンテルがデルフトに提供した「栄養」の中にメインスマ版の原稿が含まれていたのだが，その筆者はウィンテル自身ではなくクルタプラジャ（またはカルタプラジャ Kartapraja/Karta Praja）であった。クルタプラジャに関しては生没年など基本的な事柄を含めて詳細は明らかでない。以下にわかった限りのことを紹介しておきたい。特に注記するもの以外はラス [Ras 1987b: X-XI] に拠っている。

クルタプラジャは1838年4月にジャワ語学館の教員に任命された（給与月額50ギルダー）〔Wieringa 1999: 259〕。それ以前，オランダ聖書協会 (Nederlands Bijbelgenootschap) からスラカルタに派遣されたヘーリック (Johan Friedrich Carl Gericke, c.1800-1857) の「助手」を務めていたというが，それがいつからかは不明である。ヘーリックは1827年から1847年まで（1839年に休暇でヨーロッパに滞在した他は）スラカルタで聖書の翻訳

などに従事していた。1832年ジャワ語学館の設立と同時にここでジャワ語を教えたが、1837年にその任務から離れた〔ENI 1: 782-3〕。クルタプラジャはこれと入れ代わるかのようにジャワ語学館の教師になったことになる。

ラスによれば、クルタプラジャはクリウォン (kliwon) というプリヤイ (priyayi, 貴族) の地位をもっていたので、スラカルタ宮廷に関わる職位、おそらくクラトン (kraton, 王宮) の図書館に入ることのできる役目にあっただと考えられる。ヘーリックが彼を「助手」にしたのは、彼の言語と文学の知識のゆえであることに疑いはなく、ジャワ語と古代ジャワ語研究の大家コーヘン・ストゥアルト (Abraham Benjamin Cohen Stuart, 1825-1876) 〔ENI 1: 496-7〕はこの点でクルタプラジャを称賛しているという。しかし、今日クルタプラジャの作品として確認できるのはマニック・マヤ (Manik Maya) とババッド・スンカラ (Babad Sengkala) の2点にとどまるようである〔Pigeaud 3: 273〕。前者は稲作や稲の神に関する神話 (韻文) であり〔Pigeaud 1: 154〕, 後者は一種の歴史年表 (散文) である〔Pigeaud 2: 44〕。両作品とも王立デルフトアカデミーの写本コレクションに収められ、現在はレイデン大学図書館の所蔵である。

ジャワ語学館の教育のために散文テキストが必要だったが、ジャワの文学伝統は圧倒的に韻文であったため、散文テキストは特別に作成しなければならなかった。その中心となったのがウィンテルであり、彼がジャワ人協力者とともに編集したジャワ語学習のための『ジャワ語会話 (Javaansche Zamenspraken, 2 vols.)』は、語学テキストであると同時にジャワの社会と文化、文学についても貴重な情報源として高く評価されているという。ウィンテルはまたジャワ語古典文学作品の簡略散文版をいくつも作成した〔Uhlenbeck 1964: 107 参照〕。そうした散文テキストのひとつがクルタプラジャによる『ババッド・タナ・ジャウイ』であった。

じつはウィンテルはクルタプラジャの作品に満足せず、「改善版ババッド (Verbeterde Babad)」を作成した。文体上の誤りが少ないことと1721年までではなく1743年まで扱っているという違いがあるという。しかしメインスマはこの「改善版ババッド」を参照して修正を施しつつも、刊行したのはクルタプラジャのものであった。

クルタプラジャとウィンテルがともに依拠した韻文版の手写本があったと推測される。それはバライプスタカ版とともに「大ババッド」と通称されるテキスト群に属するのだが、まだ特定されていないようである。メインスマ版とバライプスタカ版の元テキストが異なることはまず確実である。その一つの小さな根拠をあげると、第29章でパジヤンのスルタンの即位名アディウィジャヤ Adiwijaya が記されるが、本訳稿の底本であるメインスマ版はアウィジャヤ Awijaya と誤っている〔Ras 1987a: 68; Ras 1987b: 70〕のに対して、バライプスタカ版はこの即位名を記さない（第32詩章第81詩節、第4分冊71頁）。この即位名がアディウィジャヤであることは『ババッド・タナ・ジャウィ』以外の諸文献から明らかであり、テーウ作成の索引もアウィジャヤをアディウィジャヤの間違いとしている。

参 考 文 献（追加分のみ）

- 青山亨 2004「南海の女王ラトゥ・キドゥル——一九世紀ジャワにおけるイスラームをめぐる文化的表象のせめぎ合い」『総合文化研究』（東京外国語大学総合文化研究所）8: 35-58.
- Uhlenbeck, E. M. 1964: *A Critical Survey of Studies on the Languages of Java and Madura*, 's-Gravenhage.
- Wieringa, E. P. 1999: "An Old Text Brought to Life Again: A Reconsideration of the 'Final Version' of the *Babad Tanah Jawi*", *BKI* 155-2: 244-263.

ババッド・タナ・ジャウイ

第4部 ババッド・パジャン 2

目次

- 28. キ・パマナハンがマタラムを開拓する
- 29. パジャンのアディパティがスルタン位に就く
- 30. キ・パマナハンが死に、セナパティが後を継ぐ
- 31. セナパティがクドウとバグレンを獲得する
- 32. セナパティに星が落ち、ニヤイ・ララ・キドゥルと邂逅する
- 33. スナン・カリジャガがセナパティに住居を壁で囲むよう諭す

28. キ・パマナハンがマタラムを開拓する

やがてキ・パマナハンは都を去ってクンバン・ランビル村に居を定め、苦行を行った。長い時間が流れてからスナン・カリジャガがパマナハンを訪ねておいでになった。パマナハンはただちにパンディタ〔賢者〕の足許にひれ伏した。作法どおりに座ると、パンディタは申された。「なにゆえにお前は、パジャンの者を去ってここに居を移したのか」。パマナハンはお答えした。「おわかりになりませぬか。身共が申し上げるまでもなく、きっとすでにご存じのはずでは」。パンディタは微笑んで申された。「まことに、わしはお前の思いがわかっておる。言うにおよばず。さあ、わしの供をせよ。パジャンの者に挨拶に行くとしよう。お前はあの者と兄弟弟子なのだから、考え違いがないよう、わしはお前たちを兄弟として仲直りさせねばならない」

パンディタはパジャンへとお発ちになり、パマナハンはお供をした。案内を乞うことなく王宮にずかずかとお入りになった。ちょうどそこにいた

スルタンはパンディタのおいでになるのを見ると、いそいで近づき、足許にひれ伏した。そして座にご案内した。

パンディタはスルタン陛下に申された。「これ、スルタンよ、なぜお前は兄なるパマナハンへの約束を違えるのか。お前はパティと並んでマタラムの地を報酬として約束し、兄キ・パンジャウィはすでにパティを受けとったが、パマナハンはまだマタラムを受けとっておらぬ」。スルタンはお答えした。「私めがいまだマタラムをパマナハン兄に与えませぬのは、まだ土地が不毛で住民がわずかだからでございます。パマナハン兄には別の国を与えるつもりでした。住民が多くて栄えている国を選んであげましょう」。パンディタは、スルタンの心の中の葛藤がすでにおわかりだったが、素知らぬ顔で申された。「なにゆえ、スルタンよ、パマナハンに他の国を与えようとするのか。そなた自らパティとマタラムを報酬と約束したのは周知のこと。パマナハンにマタラム以外の国を与えるなら、信用ならぬ王とそしられよう。ただちにマタラムをパマナハンに与えるがよい。だれも腹を立てることがなく、兄弟仲を固めるために」

スルタンはパンディタになにも答えず、黙りこんでしまった。もしお師匠様を畏怖していなかったなら、マタラムがパマナハンに与えられることはきつとなかっただろう。ついに静かに口を開いた。「私めがマタラムをパマナハン兄に与えませぬのは、将来マタラムに私めと同じように偉大な王が立つだろうというスナン・ギリ様の予言を聞いたからでございます」

パンディタは申された。「それがそなた心のわだかまりならば、簡単なことじゃ。そなたの兄パマナハンが忠誠を誓うのじゃ。わしが証人になろう。さあ、パマナハンよ、弟なるスルタンに忠誠を誓いなさい。わしが証人になる」。パマナハンはただちに誓いを唱えた。「尊敬するパンディタ様、あなた様を証人として。もしも私がマタラムにおいて王になろうと思ったり、またはパジャンの王位を奪おうと考えるようなことがあれば、わが身

にもはや安寧は得られませぬ。後々のことはわかりませぬ、誰ぞアラーの思し召しを知りましょうや」。パンディタはパマナハンに申された。「そなたの誓いはこれで十分じゃ。わしが証人である」

スルタンもパマナハンの誓いを聞いて満足したが、その言葉に隠された意味に気づかなかった。そしてパマナハンに言った。「さあ、パマナハン兄よ、マタラムを受けとられよ。まだ森のままだが」。パマナハンはいくつを受けとり、おおなる感謝を申し述べた。パンディタが申された。「パマナハンよ、すぐに妻子ともどもマタラムに移りなさい、わしはお前とスルタンの仲が本物になるよう祈ることとしよう。では、お前たちはここに残りなさい、わしは家に戻るとしよう」。パンディタは去っていかれ、パマナハンも家に戻り準備を整えた。

さて、パマナハンには7人の子があった。一番上はラデン・ガベヒ・ロリンパサルであり、2番目はラデン・ジャンプ、3番目はラデン・サントリ、4番目はラデン・トンペ、5番目はラデン・カダウンといい、6番目は娘で、バジャンのトゥムンゲン・マヤンと結婚した。7番目は娘で、バジャンのアルヤ・ダダップ・トゥリス *arya Dadap-Tulis* と結婚した。2人の娘は夫に従い、マタラムには行かなかった。

準備が整うとパマナハンは妻子や一族とともに王様に出立のあいさつに参上した。スルタンの前に出ると、暇を乞い、そして手を取りあつた。スルタン陛下は申された。「兄者よ、出立する者に安寧のあらんことを。残る者にもまた安寧のあらんことを」。キ・ジュルも王様と手を取りあい、パマナハンの妻子と一族は代わる代わる王様の膝に口づけした。ラデン・ガベヒ・ロリンパサルはスルタン陛下の長男パンゲラン・ブナワ *pangeran Benawa* と抱きあい、ともに涙を流した。

パマナハンと妻子は一族あげて、みなで荷物を分けあつて担ぎ、列をなしてバジャンを発っていった。準備整い、一人として後に残る者はなかつ

た。たいへんゆっくりと進み、こうしてタジ Taji に着くと一行は歩みを止め、ワリンギンの下に座った。

さて、カランロ Karang-Lo のキ・アグンなる者がいて、パマナハンがマタラムに居を移すことを知ると、ご飯に鶏のプチュル pecel〔野菜のピーナツソースあえ〕とジャンガン・ムニル jangan menir〔トウモロコシとホウレンソウのスープ〕を添えて歓待しようとした。妻と一緒にタジにやってきてパマナハンに挨拶し、「ご飯に鶏のプチュルとジャンガン・ムニルを添えておもてなしいたしたく。どうぞお疲れを癒されますよう」と申し上げた。パマナハンは「いかにも、友よ、そなたのご厚意まことにありがたい」と答え、妻子とともにそれをいただき、一行の者に分け与えられ、みな満腹になった。パマナハンはカランロに言った。「まことにかたじけない、友よ。わしと我が一族みなとても美味しく食べ満足した。そなたに恩義を感じる。いずれおいに報いることができることを約束しよう」。キ・アグン・カランロはありがたきお言葉とお答えした。こうしてパマナハンはそこを立った。キ・アグン・カランロもマタラムまで案内するつもりで同行した。その道中ずっと将来取り立てられることをお願いし続けた。

一行がオバック Opak 川に着くと、ちょうどスナン・カリジャガが水浴をしておられた。パマナハンとキ・アグン・カランロはパンディタのもとにいそいだ。パマナハンは右のおみ足をぬぐい、キ・アグン・カランロは左のおみ足をぬぐった。パンディタは静かにパマナハンにお話しになった。「覚えておくがよい。このキ・アグン・カランロの子孫は将来そなたの後裔と繁栄を共にするであろうが、それはマス mas やラデン raden といった貴族の称号を帯びるためではないし、王族用の輿や駕籠に乗るためでもない。よろしい、旅を続けなさい」。こうしてパマナハンとキ・アグン・カランロは出発し、マタラムに着くと屋敷を整えた。これは1532年のことであった。

さて、マタラムであるが、ここは土地が平らで水が豊富、果実は樹木の果実も、地中の果実も、蔓の果実もよく実った。作物はどれも豊かな稔りをもたらした。水陸の楽しみもまた多かった。泉の水はすべてこの上なく澄んでいた。商人もまた多かった。こうして大勢がここに移り住むようになった。パマナハンはキ・アグン・マタラムと改名し、一族みなよい生活を享受した。

しかしキ・アグン・マタラムはたえず厳しい苦行に励んでいた。やがてマタラムに偉大な王が出現しジャワ全土を支配するというスナン・ギリの予言を意識していたからである。キ・アグン・マタラムは、その予言が正しいならば、それは自分の子孫にほかならないことを望んだのだった。それゆえキ・アグンは不断に苦行を行い、あるいはまた森や山にこもった。ある時パマナハンは一人で修行にでかけ、キドゥル山地〔キドゥルは南の意〕に友人キヤイ・アグン・ギリン kyai ageng Giring 別名キ・アグン・バデレサン ki ageng Paderesan を訪ねていった。大の親友で実の兄弟のように仲良くしていた。

さて、キ・アグン・ギリンもまた厳しい苦行をしていた。彼の仕事はヤシ汁取りで、その朝もココヤシ林に行った。キ・アグンが登っている木のそばに1本、まだ実をつけたことがない木があったが、その日は若い実が1つついていて、汁も十分入っているようだった。キ・アグンが樹上でココヤシ汁を受ける竹筒を取り付けようとしたその時、声が聞こえた。隣の若い実からだった。「キ・アグン・ギリンよ、よく聞くがよい、この実の汁を飲み干した者の子孫はみな偉大な王となりジャワ全土を支配するだろう」。キ・アグンはこの声を聞くといそいでヤシ汁取りから降り、竹筒を下に置いて若いココヤシの木に登った。その実を摘み取ると下に降り、さっきの竹筒のことは忘れ、すっかりこの若い実に気を奪われ家に持ち帰った。家に着くとその実の上部を切り取ったが、すぐには飲まなかった。という

のも、まだ朝だから喉が渇いてないので、いま飲んでもきっと飲み干せないだろうと考えたのだった。まずは森を開きにいった喉を渇かそうと考えた。若いココヤシの実のは台所の棚の一番上に置かれた。キ・アグン・ギリンはすっかりあの実に心を奪われて、この日はルゲン legen〔製糖用ココヤシ汁〕を煮て砂糖を作るいつもの仕事に気乗りせず、森へ木を伐りに出て行った。

キ・アグン・ギリンが家を出た後にキ・アグン・マタラムがやってきて、キ・アグン・ギリンの妻に尋ねた。「お姉さん、お兄さんはどこに。姿が見えないが」。ニヤイ・ギリンは「森へ木を伐りに行きましたよ」と答えた。そこでキ・アグン・マタラムはキラン kilang〔製糖用に濃縮した汁〕を飲もうと台所に入った。誰もおらず、キランもルゲンも見当たらず、ココヤシがひとつ棚にあるだけだった。キ・アグン・マタラムはそれを手に取ると家に入り、座床に腰掛け、その汁を飲むための穴を整えながらニヤイ・ギリンに言った。「お姉さん、どうしてルゲンを煮ていないのだろう。何か飲もうと台所にいった、ルゲンを搜したが見つからない」。ニヤイ・ギリンは「本当に今日に限ってほっぱりだして。あの人はちょっと休みたいのでしょう」と答えた。彼女はキ・アグン・マタラムがココヤシを飲もうとするのを見てびっくりし、あわてて言った。「あなた、そのココヤシを飲んではいけません。何度も言いつけられてるのよ。もし本当に飲んでしまったら私はあの人にきつく叱られます」。キ・アグン・マタラムは答えた。「お姉さん、心配いりませんよ。私があまりに喉が渇いていて、たまたま台所に若いココヤシがあって、自分で木に登らなくてすませたのだと言えばよいでしょう」。こう言うやキ・アグン・マタラムはココヤシを一息で一滴も残さず飲み干した。ことのほか美味しかった。

その後間もなくキ・アグン・ギリンが薪を担いで帰ってくるとまっすぐ台所に入った。薪を下に置くと若いココヤシを飲み干そうと棚の上を見た

が、そこにココヤシはなかった。キ・アグンはいそいで家に入り、キ・アグン・マタラムに挨拶もせずに妻に尋ねた。「おい、さっきあその棚に置いたわしのココヤシはどこにある」。彼女は答えた。「そのあなたの弟が取ってきました。わたしは止めたんですけど、無駄でした。とても喉が渴いているからと飲み干したと言うのです」。キ・アグン・マタラムが引き取って言った。「そのとおりだよ、兄さん、自分がココヤシを飲みました。本当にとても喉が渴いてたから。もしそれで怒るんなら、すきにしてください」

キ・アグン・ギリンはパマナハンの言うことを聞くと残念でならず、黙り込んで自分の世界に閉じこもってしまった。ようやくそれは神意であると覚悟がついた。キ・アグン・マタラムがジャワの国を支配する王の始祖となることはアラーの思し召しによるのだとわかった。そのココヤシから聞こえた声のことを打ち明け、そしてキ・アグン・マタラムに頼み込んだ。「一つだけ頼みがある。お前がココヤシを飲んでしまった以上、もはや如何ともしがたい。ただひとつ、将来わしの子孫がお前の子孫と交互になること。お前の子孫が最初で、その後をわしの子孫が継ぐことだ」。パマナハンは承知しなかった。キ・アグン・ギリンはこの頼みを6度繰り返したが、キ・アグン・マタラムは受けなかった。そこで自分の子孫の1人を7番目の王にするよう求めた。キ・アグン・マタラムは「弟よ、アラーのみご存じである、いま前もって認めたとしても、わしらにはわからぬことよ」と答え、別れを告げてマタラムに帰っていった。

時が流れて、キ・アグン・マタラムの息子ラデン・ガベヒ・ロリンパサルが割りない仲になったのは、カリニヤマツトからきてパジャンのスルタンが自分のために選び、キ・アグン・マタラムに託していた娘であった。スルタンからこの娘が年頃になったら戻すよう命じられていた。ところが、まさに年頃になろうという娘はラデン・ガベヒと愛しあっていたのである。

ことの重大さにキ・アグン・マタラムはたいへん心を痛めた。スルタン陛下の怒りを買うのは必定だった。

こうしてキ・アグン・マタラムは不手際を申し上げるためにラデン・ガベヒをつれてパジャンに赴いた。到着すると、宮廷に参内した。スルタン陛下と挨拶を交わすと、キ・アグン・マタラムは申し上げた。「私めがここに伺候しましたのは、陛下の王子ラデン・ガベヒ・ロリンパサルの生死を陛下にお任せいたしたいためでございます。陛下に対して甚だしい間違いを犯してしまいましたので」。スルタンはパマナハンの言葉を聞くとおおいに驚きお訊ねになった。「その方がわしに生死を決めさせようという、ガベヒの間違いとはいったい何か。わしの長男として受け入れておるのだから、その方はもはやガベヒに権利をもたぬが」。キ・アグン・マタラムはお答えした。「私めがガベヒを陛下のもとに連れてまいりましたのは、陛下のご意向をさしおいて、かつて私めに託されましたカリニヤマットの娘と通じてしまったためでございます。じつに私めの監督不行き届きでございます」。スルタン陛下はこう申された。「そなた、ガベヒの過ちがそれだけならば、許してつかわす。結婚させるがよい。認めてつかわそう。ただし、将来この娘が捨てられるような時、無慈悲に扱ってはならぬと命じておく。だいたい、そなたがガベヒの養育に十分注意しなかったのが良くない。大きくなった男児というものは、間違いを犯すことがないよう、結婚させるか側女を与えるべきだったのだ」。キ・アグン・マタラムは、スルタンが心の中で腹を立てていると感じ、その怒りがやわらぐよう言葉を尽くした。スルタン陛下が言葉を発せられることがなくなると、キ・アグン・マタラムとラデン・ガベヒはマタラムに戻る許しを乞うた。

マタラムに戻ると、ラデン・ガベヒは本当にその娘と結婚した。やがて男の子が生まれ、見目麗しく、ラデン・ランガ raden Ranga と名付けられ、両親からたいそう可愛がられた。

29. パジャンのアディパティがスルタン位に就く

さて、パジャンのスルタンは全軍を率いてギリに進み、キ・アグン・マタラムも随陣した。スナン・パラペンにスルタン位に就く許可を求めるためであった。この時東方のブパティたちは残らず揃っていた。ジャパン Japan, ウィラサバ Wira-Saba, クディリ, スラバヤ Sura-Baya, パスルハン Pasuruhan, マドウラ Madura, スダユ Sedayu, ラスム Lasem, トゥバン Tuban, そしてパティのブパティであり、みなそこに陣屋を建てた。

その日スナン・パラペンが謁見にご出座になった。パジャンのスルタンとブパティたちは並んで座し、家来たちはそれぞれの主人の後ろに座った。パジャンのスルタンは呼ばれて聖バンディタの近くに座り、そしてスルタンの位に就き、パジャンにおいて国を治め、スルタン・プラブ・アウィジャヤ sultan prabu Awijaya¹⁾と称することが宣言され、あわせて聖バンディタもこれをお認めになった。これは1503年のことであった。

つづいて王宮からもてなしの料理の数々が切れ目なく運ばれてきて、スナン・パラペンとパジャンのスルタン、そしてブパティたちは共にめしあがった。聖バンディタがお話しになった。「汝ら、我が子なるブパティたちよ、兄弟として互いに親しみ、心に不和を抱えることなく、みなともに繁栄あらんことを。おのおのの地位をアラーに感謝せよ。地位の高い者も立場の小さき者もおのおのの定められた運命である。わしは、われらが子孫たちがみな現世においてまた来世において安寧ならんことをアラーにお願い願うものである」。ブパティたちはみな声を揃えて感謝の意をのべた。ブパティたちが食べ終わると、残りが家来たちに与えられた。家来たちもみなお相伴にあずかった。

ギリのスナンはキ・アグン・マタラムを見つめておられた。スナン・ギリは予見できるからである。そしてパジャンのスルタンにお尋ねになった。

「これ、あの後ろで食しているそなたの家来は何という名か」。スルタンはお答え申し上げた。「あの者はマタラムの頭領でございます。800カルヤの土地を支配しております」。賢者王は申された。「あの者を近くに呼び、ブパティたちの列に座らせなさい」。キ・アグン・マタラムが前に進むと、賢者王はブパティたちに語りかけられた。「わが子ブパティたちよ、みな覚えておきなされ、ここなるキ・アグン・マタラムの子孫たちは将来ジャワ全土の人々をすべて支配するであろう。ここギリですら将来マタラムに服従するであろう」。キ・アグン・マタラムは聖パンディタのこの言葉を聞くと、地面にひれ伏しておおいなる感謝を表した。そして聖パンディタから一振りのクリスを与えられたが、固辞して受け取らなかった。ブパティたちはみなキ・アグン・マタラムに好意のまなざしを向けていた。つづいて賢者王はブパティたちに池を掘るようお命じになった。ブパティたちの兵士がただちに土を掘り始めた。池ができあがるととても美しく、聖パンディタによりパトゥット Patut〔一致結束〕池と名づけられた。

パジャンのスルタンとブパティたちは別れを告げておのおのの国に戻っていった。キ・アグン・マタラムもマタラムに戻った。パジャンのスルタンは自分の都に戻ると子どもたちと全武将に、スナン・ギリの予言がどんなものだったかを語った。ブパティたちとマントリたちはこのような予言を聞いておおいに驚いた。スルトンの息子のパンゲラン・ブナワは言った。「父上、もしもスナン・ギリ様のその予言が真実を含んでいるとすれば、マタラムは一粒の火花にたとえられましょう。広がらないように直ちに水をかけるのがよろしゅうございます。陛下がお許しくださるならば、私めがマタラムを攻めつぶしましょう」。ブパティたちはみなパンゲラン・ブナワに賛成し、賛同の声を上げた。スルタンは落ち着いて申された。「わが子よ、お前の言うことは正しい。マタラムにどれほどの者がおろうか。お前が攻めたならきっと征服できよう。しかしながらアラーの定めに触れ

てはならぬ。それは人間の考えを超えたものじゃ。それを企てた者はきつと破滅するというスナン・ギリ様の警告をわしは恐れる」。パンゲラン・ブナワと高官たちは感動のあまり何も言えなかった。

30. キ・パマナハンが死に、セナパティが後を継ぐ

さて、キ・アグン・マタラムは子どもたちと一族みなの前に座し、申し渡した。「わが子どもたちとわが一族の者たちよ、わしはスナン・ギリ様によってわが子孫が将来ジャワの国を支配すると明かされたゆえ、次のことを命じておく。いつかお前たちが東部へ進撃する時には、わしがスルタンと一緒にギリ様に伺候したのと同じ日、つまりムカラム Mukaram 月〔ジャワ・イスラム暦第1月〕の金曜日パインの日にせよ。必ず心して守らねばならぬ。またもし攻められたら、クンドウン Kendeng 山地を越えて迎撃してはならぬ。戦いが不利になるゆえ。さらに、わしの後裔たちが将来ズパティを任命する時には、今のマタラム人の末裔でなければならぬ。苦難をとともにする者たちだから。もしその子孫たちが死に値する罪を犯したら、体刑に留めよ。体刑の罪であったなら、許してやれ」。キ・アグンの子どもたちと一族への指示はとてまたくさんあった。

マタラム王国はすでに豊かに栄え衣食は安価であった。キ・アグンは重い病になり、ジュルマルタニに指示した。「そなた、わしはまもなく定めの時となろうから、わしの子どもたちの面倒をみてやってくれ。跡継ぎはガベヒ・ロリンパサルとする」。キ・アグンは子どもたちに言った。「わが子たちよ、お前たちみなジュルマルタニ叔父の言うことを聞きなさい」。こうしてキ・アグンは亡くなった。遺体は清められモスクの西に埋められた。1535年であった。

翌日ジュルマルタニはキ・アグン・マタラムの子どもすべてを連れてスルタン陛下にご報告のためパジャンに向かった。一行がパジャンに着くと、

スルタンはちょうど謁見にお出ましになっていた。キヤイ・ジュルとその甥たちは広場中央のワリングン・クルンの南に座った。スルタン陛下の目にとまりそれが誰かわかるとすぐにお呼びになった。みな陛下の前にひれふした。そしてキヤイ・ジュルは、マタラムの頭領が亡くなったことをお知らせし、5人の息子が残されたことを申し上げ、陛下はそのうち誰が後を継ぐのをお望みになるかお尋ねした。スルタン陛下はマタラムの頭領の亡くなったことを聞いてたいそう驚かれ、そして申された。「ジュルマルタニ兄よ、マタラムにおける跡継ぎにわしは、わが息子ガベヒ・ロリンパサルを指名する。そしてセナパティ・インアラガ・サイディン・パナタガマ Senapati-ing-Alaga Sayidin Panatagama の名前を与える。加えて、ジュルマルタニ兄よ、そなたにわが子セナパティの世話をまかせる。1年間わしはセナパティがパジャンに伺候するのを許さないことにする。自分の地域を整えさせ、マタラムを繁栄せしめよ。1年が過ぎたらただちに伺候せしめよ。遅れさせないように」。キヤイ・ジュルとセナパティは心得ましたと申し上げ、スルタン陛下の膝に口づけした。そしてただちにマタラムに戻る許しを乞うた。

マタラムではますます住民の数が増え、ますます繁栄した。セナパティ・ガラガは豊かな生活を送った。そしてマタラムの人々に城壁を造るためにレンガを焼くよう命じた。1年はすぐに過ぎたが、セナパティはまだパジャンに挨拶に向かわなかった。キヤイ・ジュルは何度も伺候するよう促したが、セナパティは「いずれ、スルタンが私を呼び出す使者を送られたら伺候しましょう」と答えるだけだった。

さて、パジャンのスルタンは謁見のためにお出ましになり、宝石をはめ込んだ黄金の玉座にお座りになった。玉座の下には花模様の絨毯が敷いてあった。プパティたち、マントリたち、ランガたち、ドゥマンたちがみな謁見のために揃っていた。スルタン陛下の輝きは満月のようにであった。陛

下はそこに控える家臣たちに穏やかに申された。「みなの方、わが息子セナパティについて何か存知おるか。もう1年経ったのにパジャンに挨拶にこぬ。スナン・ギリ様の予言を知っているからわしに挨拶にこぬのであろうか。もはやスナン・ギリ様の予言はほぼ確かなことじゃ。花にたとえるならば、まだ蕾だが、今や開こうとする時である」

パジャンのスルタンは超能力とスクティ〔霊力〕が人並み優れた王として知られ、大軍を擁しており、もしマタラムを破滅させる気になればためらう必要はなかった。しかしその意志を妨げる何物かがあるかのようであった。ブパティたちは申し上げた。「畏れながら、陛下のご子息セナパティ殿に異心ありと知らせを受けております。城壁を作るためレンガを焼くよう命じられました」。そこでスルタンはガベヒ・ウラギルとガベヒ・ウィラマルタ Wila-Marta に「お前たち2人はマタラムに行き、セナパティの態度をよく観察せよ」とお命じになった。キ・ウラギルとキ・ウィラマルタはかしこまりましたと答えて馬に乗って出立した。

2人はマタラムに着いたがセナパティに館では会えなかった。気晴らしに馬に乗ってリブラ Lipura に出かけていたのだった。2人の使者はその後を追った。リブラに着くとセナパティが乗馬を楽しんでいるのが見えた。ウラギルはウィラマルタに言った。「さあ、馬から降りてスルタン陛下がお呼びだとお伝えしよう」。ウィラマルタは答えた。「お前が先に馬から降りたなら、お前はお前を差し遣わされた御方を敬わないことになる。使者がお言葉を伝える時には主自身のようなものなんだから。お言葉を伝える相手が相変わらず馬上にあるにもかかわらずそうするのは、お前はスルタン陛下を侮辱することになる。お前はだめな使者ということになるだろう。その上わしと思うに、セナパティ様はお前とわしがスルタン陛下に遣わされてきたことをすでに知っておる。だから馬から降りないのは意図的なのだ」。ウラギルは反論した。「まだそうとは限らない。思うに、セナパティ

様は、お前がスルタン陛下により遣わされたと言えば、きっとすぐに馬から降りるはずだ」。こうして2人は馬から降りてセナパティに向かった。セナパティは馬に乗ったまますぐに尋ねた。「ウラギルとウィラマルタよ、お前たちはスルタンに遣わされたのだろう」。ウィラマルタはウラギルに言った。「どうだ、俺が正しかただろう。セナパティ様はわざと下馬しないのだ。お前と俺はへぼな使者だ」

ウラギルはいそいでセナパティに答えた。「いかにも、身共2人はスルタン陛下に遣わされました。あなた様は、しょっちゅう宴会をして飲食ばかりしていないで、髪を剃ってパジャンに伺候するよう命令されております」。セナパティは馬に乗ったまま答えた。「スルタン陛下にこう申せ。飲食をやめよと命じられるが、わしはもっと楽しみたい。髪を剃れとの命令だが、髪は勝手に生えてくる。どうして髪をなくせようか。伺候せよとの仰せだが、よろしい、そうしようではないか。もしスルタンが姉妹を2人とも娶ったり、家来の妻や娘をしょっちゅう取り上げるのをやめるなら、そうしようではないか。わしの返事はこれだけだ」

こうして2人の使者は別れを告げて戻っていった。パジャンに着くと、2人は嘘でごまかすことにし、スルタン陛下に申し上げた。「陛下の王子セナパティ様にお呼びをお伝えしますと、かしこまりましたとのことでしたが、私めらに先に戻るよう命じられました。王子様はすぐに後を追ってまいります」。これに対してスルタン陛下は黙ってしまい、あれこれ尋ねようとされなかった。

セナパティは自分の館でジュルマルタニと向かいあっていた。キヤイ・ジュルは語った。「さて、お前はとういうつもりなのか。父なるスルタンから呼び出され、しかし伺候しようとせぬ。もちろんスルタン陛下はご立腹で、お前は陛下に敵対することにならざるをえまい。敵対して、何に頼めるのか。お前の軍勢はわずかばかりで、まさか向こう見ずにパジャン軍に

挑戦しようというのではあるまい。あえて戦えば潰されるだけだ。のみならずバジャンのスルタンは靈力が人並み優れていると名高く、他の国々の王たちが畏敬しておる。実際かつてドドットをかぶって寝ている時に刺客に不意打ちを食らったことがある。賊たちはスルタンを刺した。しかしスルタンにはハエが止まったようにしか感じられなかった。掛け布さえ傷つかなかった。お前は陛下の不死身さを知らねばならぬ。さらには、もし仮にスルタンに敵対したら、お前は何に頼るのか。お前の超自然力を頼としても、濡れることなく水の上を歩くことができ、焼かれることなく火の中に入ることができ、あるいは靈力あり不死身であること、こうしたお前の能力はすべてスルタン陛下の教育の賜物なのだ。スルタンはお前を小さい時から長男として受け入れ、実の子同様に前をとても寵愛されたからだ。お前が成長するとともに、スルタンはお前にあらゆる知識とカセクテン、不死身の力を教え込み、そしてさらにお前にマタラムでの十分以上の生活を与えられたのだ。こうしたすべてに、お前はスルタン陛下のご寵愛に何で報いようというのか。お前は3つの過ちを犯している。第一に主人に敵対すること。第二に父親に敵対すること、そして第三に師匠に敵対すること。お前を嫌いな人びとが何と言ってお前を笑うことか。こう言うだろう。『セナパティが無謀にも戦争をするものよ。自分の父親に敵対する奴だ。他の者と戦争するのが怖いのだ』。そしてわしはバジャンの人びとに会うのがとても恥ずかしい。恥知らずと言われるだろうから。お前はむしろ他の王国、バジャンより大きい別の国と戦うがよい。わしは恐れぬぞ」。キヤイ・ジュルは諄々と説き聞かせた。

セナパティ・ガラガはこれ聞いて、間違いを犯したとわかり、心のなかで涙を流した。そして気持ちを静めながら答えた。「叔父上、私はどうすればよいのでしょうか、ご助言ください。私はスルタン陛下に伺候したくないなどと言いすぎてしまいましたから、陛下がご立腹にならないよう、

私がずっとマタラムにいられるよう、そしてジャワ全土の人々を支配できるよう、またそれを子孫に伝えられるようにするにはどうすればよいでしょうか」。キヤイ・ジュルは言い聞かせた。「それがお前の望みであるならば、よろしい、アラーにかたくお願いすることだ。スルタン陛下がお亡くなりになったら、お前が代わって王になることができるように。そして陛下に敵対しようなどと決して考えないことだ。お前は心の中だけでも、スルタンがお前に示された好意、スルタンに子として迎えられたこと、お前に贅沢な生活をさせておられること、そしてお前にすべてを教えられたことに、恩返しをするつもりでいなければならない。お前がこうしたことを強くアラーにお願いするならば、スルタン陛下は心の中でまだお前を愛しておられるに違いないから、心の中でお前が王位を継ぐのを承知なさるだろう」

セナパティ・ガラガは叔父にとっても感謝しその助言に従った。こうしてジュルマルタニは自分の家に戻った。そしてセナパティは日夜途切れることなくアラーへの懇願を続けた。

31. セナパティがクドウとバグレンを獲得する

ある時クドウとバグレンから徴税マントリたちが参内して年貢を引き渡すためにバジャンに向かっていた。その途中マタラムを通ると、セナパティに歩みを止められ、とても丁重にもてなされた。さらに飲食をともに楽しむよう招待され、みなセナパティから兄弟や親のように遇された。徴税マントリたちはみなとても喜んだ。セナパティは妻たちに踊りを踊らせ、給仕させ、香油を体に塗らせ、そして花を耳の後ろに挿させた。マントリたちはますますセナパティのもてなしを恩に着了。こうしてみな、将来セナパティが敵と事を構える時には、セナパティの返しきれない恩に報いるために進んで助勢すると忠誠を誓った。皮膚を破り血を流して返礼としよう。セナパティはマントリたちの誓いを聞いておおいに喜び、心のなかで

「今わしはアラーのみ助けにより助勢を得た。パジャンの王の地位を征服できることだろう」と思った。

徴税マントリたちはみな華美な着物の贈り物にあずかった。たいそう喜んで、口々に言うのだった。「私どもがクドゥとパグレンから出てきましたのはパジャンに年貢を運ぶためでありましたが、もうやめるといたしましょう。年貢をすべてあなた様にお渡しいたします。パジャンに王様がおられるのもマタラムに王様がおられるのも変わりはありません」。みな拍手喝采し、セナパティは言った。「わが一族のみなの方、マントリたちよ、みなを誓いをかたじけなくいただく。わが願いはみなと一緒にパジャンに伺候することである。もしスルタンがお怒りになったら、わしがみなを守ってやる。スルタン陛下の思いはすでにわしにあるのだから。わが一族の方たちよ、ドゥマン、ランガ、ガベヒ、またトゥムングンの称号を望む者がいれば、わしはスルタン陛下よりそれを与えることを許されている」。マントリたちはこれを聞いてますます喜びを大きくした。みなセナパティに王として仕えようと心をついにした。続いてマントリたちは踊りだし、または超能力や不死身さを披露した。ある者は槍を投げ上げ、ある者は鉾を投げ上げ、またある者は1ダチン dacin [約 60 kg] の重さの石を投げ上げた。落ちてくるそれらを胸や背で受けたが、一人として傷つかなかった。マントリたちはみな強い霊力を持ち、不死身なのである。

ところで、キ・ボチョル ki Bocor という名のマントリがいて、他のマントリたちの振る舞いを見てとても心配になった。こう考えたのだった。「みなどうしてしまったんだ。互いに調子をあわせて、セナパティに丸め込まれて、セナパティを王に担ごうなんて。このセナパティなんてパジャンに齒向かおうとしているつまらない人間だということがわからなくなっている。わしだけは、セナパティの超能力を自分で試さない限り奴に従うつもりはない。思うに、奴は銅の皮膚も鋼の腿ももっていない。わしの卓

越したクリス、クボドウンゲン Kebo-Dengen を突き刺しても本当に無傷だったら、臣従するとしよう」。一方パヌンバハン・セナパティはボチオルが愉楽を共にしようとしないうことから、自分を試そうとしているのは明らかだと見てとった。こう考えたのだった。「ボチオルめは他のマントリたちと違って、もてなしを喜んでおらず、わしを試さざるをえないと思っている。しかし、いかにも、ボチオルめは正しい。このわしは言ってみれば、なんとかして天に届こうとしている侏儒であって、目が見えていないのだ。そしてわしのスクティがこの大勢の者を凌がなかったなら、わしはどうしてジャワ全土を支配する王になることができる」

パヌンバハン・セナパティはここで退席し、マントリたちも宿所に引き上げた。セナパティは門を警護する兵士たちに、キヤイ・ボチオルが館に入ってきた時には黙認し、妨害せぬよう命じた。夜中になってボチオルはセナパティを殺す用意を整えた。クリスの刃にいくらかのカボック綿を置いて息を吹きかけると、綿はきれいに切れた。こうしてクリスの鋭利さを確かめるとボチオルは一人で王宮に入ってしまった。みな知らんふりをした。セナパティは食事中で、母屋の門に背を向けて座っていた。ボチオルはまっしぐらにセナパティにクリスを突き刺した。セナパティは傷つかず、振り返りもせず、おいしく食事を続けた。ボチオルのクリスの先は曲がってしまった。ボチオルはへなへなと地面に座りこんでしまい、クリスは地面に突き刺さった。すっかり憔悴してしまったボチオルはセナパティの膝に口づけし、悔い改めることを申し上げた。セナパティはこう答えた。「友なるボチオルよ、お前を許す。お前を信じる」。ボチオルは去っていった。

32. セナパティに星が落ち、ニヤイ・ララ・キドウルと邂逅する

セナパティは夜中に5人の従者を連れてリプラに赴いた。そこには美しい色の平らな岩があり、セナパティはその上で眠った。ジュルマルタニは

真夜中すぎて家にいてまだ眠くなかった。そそくさとセナパティを訪ねて王宮に行った。外門にくると警護の者に尋ねた。「門衛よ、我が息子はまだ起きているだろうか」。門番たちは答えた。「キヤイ・ジュル様、宴会が終わった後、月の明かりが太陽の光に取って代わるころ、出て行かれました。どちらに行かれたかわかりません」。キヤイ・ジュルは門番たちの言葉を聞くと、セナパティの行き先がわかった。いそいでリブラへ後を追った。そこに着くとセナパティが平たい石の上で眠っていた。キヤイ・ジュルはすぐに起こそうと声をかけた。「おい、起きよ。お前は王になりたいと言うが、それにしてはすやすや眠っておることよ」

その時天から星が落ちてきた。ココヤシ丸々1個分の大きさで、セナパティの枕許で激しく光り輝いた。キヤイ・ジュルはたいへん驚き、セナパティを起こした。「おい、早く起きろ。お前の枕許で月のように輝いているのは、それは一体何だ」。セナパティはびっくりして目を覚まし、それを見て言った。「お前は一体何だ。わしの寝ているすぐ側でそんなに光り輝いて。生れてこの方見たことがない」

星はすぐに人間のように答えた。「よく聞くがよい、わしは星である。お前に伝える。聖なる思し召しの在り処を見る力を浄めたいというお前の願いは、今やすでにアラーに受け入れられた。王位についてジャワ世界を支配し、子や孫に至るまでマタラムにおいて王となり、敵う者なく、敵に恐れられ、黄金と宝石に富むというお前の懇願は許されたのだ。そしてお前の曾孫はやはりマタラムの王になる。王国はその後バラバラになる。月食と日食が頻発し、夜な夜な彗星が現れ、山は轟音を発し、灰の雨が降り、火砕流が起こる。これらは王国が崩壊する兆しである」

言い終わると星は姿を消した。セナパティは心の中で思った。「いまやアラーへのわが願いは聞き届けられた。父スルタンの後を継いで王となり、子や孫に至るまでジャワの国の明かりとなって輝くのだ。ジャワの国の人

はみな服従するのだ」。キヤイ・ジュルはこの心の内がわかって諫めた。

「セナパティよ、傲るではない。まだ起きもせぬことを当てにするではない。それは正しくない。あの星の言うことを信じたりすると、お前は誤る。なぜなら、あれは運命の声というもので、虚実定かでない。人間のような舌先に捕らわれてはならぬ。それに、お前がいつかパジャンの者と戦争することになった時、お前はこの星に約束を守らせたり、助けを求めたりできないのだ。わしとお前が自力で戦うほかないのだ。勝てば、お前はきつとマタラムで王位につき、負ければ、きつと獄につながれる」

セナパティは叔父の言葉を聞くと、とても決まり悪くなり、心を落ち着けて訊ねた。「叔父上、どのようなご助言をいただけますでしょうか。それに従いたく思います。私めは船、叔父上が舵であります」。キヤイ・ジュルは答えた。「セナパティよ、わしの言うことを聞くのであれば、では、あらゆる困難を容易にして下さるよう主アラーに懇願しよう。さあ、分担しよう。お前はキドウル〔南〕の海へ行け、わしはムラピ山に登り、アラーの思し召しを訊いてみよう。さあ、すぐともに出立しよう」。こうしてキヤイ・ジュルはムラピ山へと出立し、セナパティは真東に進み、オバック川にくと水に飛び込み、仰向けになって流れに任せて下っていった。

ところで、オロル olor という名の海の魚がいた。かつてセナパティはサマス Samas 川で投網、網、地引き網、梁による魚取りを楽しんだことがあった。漁師たちはたくさんの漁具を用い、水揚げもまた多かった。オロルが人びとに捕まった。ことのほか大きかったので、陸に上げられるとバヌンバハン・セナパティに献上された。セナパティはこれを見ておおいに喜んだ。オロルは全身金色の衣に包まれ、トゥングル・ウルン Tunggul-Wulung〔紺色の旗〕と名づけられ、水に戻された。オロルはセナパティを命の恩人と感じていた。そして今やオロルは、セナパティが流れに任せて海の河口まで下ってきたのを知ると、背中に乗せようとセナパティに近

づいてきた。しかしセナパティは乗ろうとせず、水から出て海岸に上がるとアラーに祈りを捧げた。その時雨まじりの西風が吹き、暴風雨になった。木々は裂け、また根こそぎ倒れた。山のような大波がおこり、ものすごい音をたて、海は沸き立つように熱くなった。たくさんの魚が水から飛び出し岩礁に打ちつけられ岸に打ち上げられて死んだ。これは、セナパティのアラーへの祈りの威力によるものであった。

さて、ここ南海で玉座にあったのはたいそう美しい女王だった。全世界で並ぶ者のない美しさで、名をララ・キドゥル rara Kidul といい、ジャワ全土のあらゆる種類の精霊を支配していた。その時ララ・キドゥルは宮廷にいて、宝石をちりばめた黄金の座床に座し、その前にはジン jim たち、ブリ peri たち、プラヤンガン perayangan たちがかしこまっていた。ララ・キドゥルは海の魚たちが大混乱し、水が沸き立つように熱いのを見て驚いた。海は恐ろしい音をたてていた。ララ・キドゥルは心の中で思った。「生まれてこの方一度もこんな海を見たことはありません。どうしたことでしょう、この大騒ぎは何があったのでしょうか。太陽が落ちてしまって、この世の終わりがきたのでしょうか」

そこでニヤイ・キドゥルは外に出て、水の上に立った。そこに見える世界は明るく、何事もなかった。ただ海の岸に気高い人間が一人座し、アラーへの祈りに没入していた。ニヤイ・キドゥルは自分に言った。「これが海に大混乱を起こしたお方にちがいない」。そしてセナパティの考えがみなわかった。ララ・キドゥルはいそいで近づき、拝礼の上、セナパティの足許に跪拝し、取りなすように申し上げた。「どうぞあなた様のお心の苦しみをお消し下さいませ。この大騒動が鎮まり、この騒ぎのために破壊された海の中のすべての者がすぐに元に戻りますように。あなた様、どうか私めを哀れと思し召し下さいませ。この海は私めが守護するものでございますので。そしてあなた様の主アラーへの懇願は今や許されております。あ

なた様とあなた様のご子孫はみなきつと王位におつきになり、ジャワの国を支配なさり、並ぶ者がないことでしょう。そしてジャワの国のジンたち、ブリたち、プラヤンガンたちはみな、あなた様の支配に服するでありましょうし、あなた様が将来敵をもつことがありまして、これらはみなあなた様をお助けすることでしょう。みなあなた様の望みのままに付き従うことでしょう。あなた様はジャワの国の王たちの始まりとなられるお方でありますゆえ」。セナパティの心はニヤイ・キドゥルの言葉を聞いてとても喜んだ。そして大混乱はすぐに鎮まり、死んだ魚たちも生き返った。

ニヤイ・キドゥルは秋波を送りながら拝礼して海の中へと戻っていった。セナパティはすっかり惚れ込んでしまっただけでララ・キドゥルについていった。セナパティは大地を歩くかの如くに水の上を進んでいった。海の宮殿に着くと、黄金の座床にならんで座り、その前にブリたちとプラヤンガンたちがかしこまった。セナパティはニヤイ・キドゥルの宮殿のあまりの美しさに驚かされた。御殿と周りの壁はすべて金と銀であった。庭の砂利はルビーとダイヤモンドであり、庭の植物もすべてとても美しかった。果実と花々も素晴らしかった。地上にはこれに匹敵するものはなかった。

セナパティはニヤイ・キドゥルと2人並んで座りつづけ、異性を意識して固くなっていた。ニヤイ・キドゥルの方はセナパティの表情をうかがいつつ好意のまなざしを送り続けた。セナパティは微笑み、そしてニヤイ・キドゥルに語りかけた。「ねえおまえ、おまえの寝室がどんなづくりか、知りたいものだ」。ニヤイ・キドゥルは答えた。「お心のままに、否やはございませぬ。あなた様のおいでをお待ちもうすばかりでございます」。こうしてセナパティは手を取って寝室の中に導かれた。セナパティは優しく言った。「ねえおまえ、おまえの寝室を見てとても驚いたよ。物語に言う天国のもののような。生まれてこの方このような寝所は見たことがない。美しく作ることができる持ち主にぴったりのものだ。マタラムに戻りたく

ない、ここがすっかり気に入った。しかし一つだけ足りないものがある。男がいないことだ。見目よい男がいたならどんなに良いことだろう」

ニヤイ・ララ・キドゥルは答えた。「独り身で、女王でいるだけでよいのです。私めの願いは、命令する人がいないことでございます」。セナパティは微笑みながら言った。「ねえおまえ、どうかおまえへの狂おしい思いを癒す薬を貰えまいか」。ララ・キドゥルは想いをこめて見つめながら答えた。「薬を差し上げることはできません、呪医ではありませんぬゆえ。あなた様は偉大な王様でいらっしゃいますから、私め以上の女に不足なさるはずはありませんぬ」。セナパティはすっかり熱くなってしまい、想いを達するためにララ・キドゥルを運び去った。

さて、セナパティの南海滞在は3日3晩に及び、ずっとララ・キドゥルと愛しあった。セナパティは毎日、王として立つ者、あらゆる人びととジンヤブリたちを率いる者が知るべきことがらについて教えを受けた。

セナパティは言った。「いとしい人よ、おまえの教えのすべてに心からとてもありがとう。そしてそなたを信じる。しかしもし将来敵を迎えた時、誰をそなたへ使いに出せばよいのだろう。マタラムにはそなたを知る者はいないはずだ」。ララ・キドゥルは答えた。「それはまったくたやすいことでございます。あなた様が私めをお呼びになりたければ、腕を胸の前で交差させ、両足をぴったり揃えてお立ちになり、目を天にお向けになるのでございます。そうなされば私めはすぐに参ります。ジンたち、プラヤンガンたちの軍隊が武器を携えて一緒にやってまいります」。セナパティは再び言った。「いとしい人よ、マタラムに戻ることを許して下さい。あなたの指示をすべて守ります」

33. スナン・カリジャガがセナパティに住居を壁で囲むよう諭す

セナパティは出立し、陸上に行くかのように海の水の上を歩いた。パラ

ントリティス Parang-Tritis に着くとセナパティは驚いた。お師匠様スナン・カリジャガが鍾乳石の下に座して瞑想にふけておられたのだ。ただちにその膝に口づけし、水に濡れないスクティを見せたことに恭しく赦しを求めた。スナン・カリジャガは申された。「セナパティよ、こうしたスクティの威力に頼るのをやめなさい。こういうのを人は思い上がりと言う。ワリたちはこのような振る舞いを喜ばぬ。お前はきっとアラーの怒りに触れるだろう。本当に王になりたいのならば、お命じになることを感謝して受け入れなさい。さあ、マタラムへ行こう。お前の家を見たいものだ」

こうして歩きはじめ、マタラムに着くと、パンディタは、セナパティの館がまだ囲われていないのをご覧になって申された。「お前の住まいはまだレンガ壁で囲われておらぬ。これは良くない。お前は自分のカスクテンと不死身の強さに驕り高ぶっているとそしられる。たとえば、水牛や牛に柵がなかったら、どこへ行くかわかったものではない。水牛や牛をしっかりと繋ぎとめ、夜ともなれば柵に入れ、外には見張りを置くのがよい、そしてアラーにお任せするのじゃ。屋敷地の周りに壁を作るがよい。まずは土壁でよい。マタラム人に乾季のたびにレンガを焼くよう命じるのじゃ。十分な量になったら、防御壁を作りなさい」。パンディタは水のはいったココヤシ殻を取って、祈りの言葉を唱えながら水をたらしておまわりになった。「いずれ囲壁を建てる時にはこの線に従うのじゃ」と申され、セナパティは心得ましてございますと答えた。こうしてパンディタは戻っていかれた。

訳注

- 1) アウイジャヤがアディウイジャヤの間違いであることは解題参照。